中国・日本・韓国三言語における大学生の「性向語彙」についての対照研究

中国・日本・韓国大学生性向词汇比较研究

李成浩 著

日本语言・文化・传播丛书

中国传媒大学出版社

日本语言·文化·传播丛书

中国·日本·韓国三言語における大学生の「性向語彙」についての対照研究

中国·日本·韩国大学生性向词汇比较研究

李成浩 著

中国传媒大学出版社

图书在版编目（CIP）数据

中国·日本·韩国大学生性向词汇比较研究 / 李成浩著. —北京：中国传媒大学出版社, 2009.9

（日本语言·文化·传播丛书）

ISBN 978-7-81127-722-7

Ⅰ. 中… Ⅱ. 李… Ⅲ. 性别-社会习惯语-对比研究-中国、日本、韩国

Ⅳ. C913.14 H034

中国版本图书馆CIP数据核字（2009）第153332号

中国・日本・韓国三言語における大学生の「性向語彙」についての対照研究

——中国・日本・韩国大学生性向词汇比较研究

作　　者：李成浩

责任编辑：冬　妮

封面设计：大鹏工作室

责任印制：范明懿

出 版 人：蔡　翔

出版发行：中国传媒大学出版社（原北京广播学院出版社）

社　　址：北京市朝阳区定福庄东街1号　　**邮编**：100024

电　　话：65450532或65450528　　**传真**：010-65779405

网　　址：http://www.cucp.com.cn

经　　销：全国新华书店

印　　刷：北京中科印刷有限公司

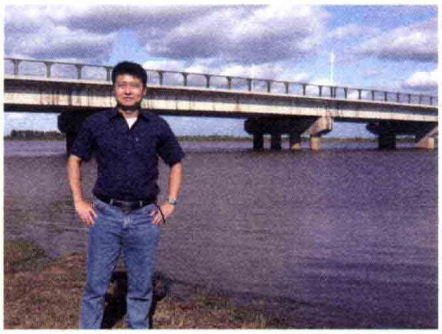
开　　本：730×988mm　1/16

印　　张：19.75

版　　次：2009年10月第1版　　2009年10月第1次印刷

ISBN 978-7-81127-722-7/C·722　　**定　价**：49.00元

版权所有　　翻印必究　　印装错误　　负责调换



李成浩　1978年生，朝鲜族，2008年3月毕业于广岛市立大学国际学研究科比较语言文化专业并获博士学位。现为北京第二外国语学院日语学院讲师。主要研究方向为日语语言学。

日本语言·文化·传播丛书

▶中国・日本・韓国三言語における
大学生の「性向語彙」についての対照研究
——中国・日本・韩国大学生性向词汇比较研究

日语语言文化研究(第三辑)

日本語授受動詞の構文と意味
——日语授受动词句结构意义研究

责任编辑：冬 妮
封面设计：

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

序 文

李成浩氏の『中国・日本・韓国三言語における大学生の「性向語彙」についての対照研究』は、比較言語文化研究の一環として、異文化間の深い相互理解と円滑な異文化間コミュニケーションの推進を一つの重要な目的に据えて、中国・日本・韓国三言語における大学生の「性向語彙」についての全体像を把握、究明しようとしたものである。

「性向語彙」は、基本的にその文化における社会的規範に照らして、人間の性格、態度や日常的な振る舞い、行いを評価の観点から表現する語の集合体であり、社会的秩序の構成原理と機能を表す言語記号システムの統合体でもある。換言すれば「対人評価語彙」とも言える。従って、性向語彙の精緻な構造分析を通して、それぞれの言語文化における行動原理や対人評価、更には労働に対する価値観や理想的な人間像を解明することが可能となる。これらの問題は、異文化の相互理解と異文化間コミュニケーションの円滑な推進にとって極めて肝要な意味を有することが言を待たない。しかしながら、日本においては地域言語の性向語彙に関して多くの研究が行われて著しい成果が上げられているが、国外の言語との対照研究は殆どないと言ってよい。一方、中国と韓国では性向語彙についての研究は皆無と言っても過言ではない。本書は、初めて中・日・韓三国の大学生に用いられている共通語の性向語彙を対象化し、その実態について実証的に記述し、その上に立った対照研究を試みた、開拓的な意義を持つ研究であると言えよう。三言語の性向語彙の量的構造と意味構造の記述、分析更に比較によって、対人評価を巡っての指向価値、行動モラルのメカニズム、社会的規範、理想的人間像などに対して初めて実証的な解析ができるようになった。また、本研究の成果や資料は中・日・韓の比較文化研究に大いに寄与できると期待され、更に、中・日・韓のそれぞれの相手国に進出している企業における異文化間コミュニケーション上の摩擦の解消や異文化理解、教育にも有益であり、貴重なものとなると位置づけられよう。

本書は、中・日・韓三国の各100名の大学生を対象にアンケート調査して得た豊富な具体例に基づいて若者の「性向語彙」の全容把握、プラス評価語彙とマイナス評価語彙の比較、語彙量と意味の構造、語形成、造語法についての考究を基軸に展開されている。その特徴は数多く指摘できると思うが、その二三を挙げるならば、先ず、第一章での量的統計、比較によって三言語ともマイナス評価語彙数(貶し言葉)はプラス評価語彙数(褒め言葉)よりも遙かに多く認められている共通点が判明し、「マイナス

評価語彙」(負性の原理)の絶対的な優位性の実態が浮き彫りになり、そこから導かれる「期待されざる人間像」について説かれている。次に、第三章では仕事や言語活動に関する対人評価意識について比較を行った。三言語はいずれも「働き者」と「怠け者」に強い関心を寄せ、特に「怠け者」に対しての性向語彙は多様で細かく分節している。これは「怠け者」のような労働秩序を乱す行為を厳しく糾弾することによって平等に働くことを促し、社会的規範を保つことにつながるためであると説明されている。一方、プラス評価すべき「人一倍仕事に熱中する人」に対して三言語とも三割以上ものマイナス評価語彙が確認され、「人並みの働き」が「指向価値」として若者の社会において機能していることが分る。

李成浩氏は、かつて筆者の講筵に列して、入学するや筆者の恩師で、性向語彙研究の第一人者であられる室山敏昭先生の提唱される民族間の性向語彙の対照研究に触発されて、多言語の性向語彙に関する対照研究という未開拓の研究課題に挑みたいと意を決した。以来、君は、中国・日本・韓国三言語における大学生の「性向語彙」の対照研究に取り組み、本書を纏め上げるために、様々な困難を乗り越え、六年もの年月を重ねてきたのである。その成果がこのような形で結実したことは筆者にとって正に感無量である。

本書は、精密で且つ意欲的な実証研究として、中・日・韓三言語における性向語彙についての対照研究に新たな知見と示唆を与えると共に、今後の中・日・韓三国の比較文化研究、異文化理解と教育にも寄与できると期待される。願わくは国際的視野と文化言語学的視点を加えることによって、本書を包摂する第二、第三の著を為さんことを。

最後に、北京市公立大学の出版助成金により早期の本書刊行に対して李成浩氏と共に感謝の意を表したい。中・日・韓三言語の教育、研究に携わる諸先生方及び中・日・韓三言語を学ぶ皆様方にお読み頂けることを願って止まない。

2009年3月

広島市立大学教授栾竹民

目　次

序 文 1

研究篇

序 章 1

第一節　本研究の目的と位置づけ ―― 2

1-1　性向語彙研究の推移と現状　5

1-2　理論研究と実証研究　6

1-2-1　方言性向語彙研究の推移　6

1-2-2　室山敏昭氏による研究　9

1-3　研究の特色・独創性　11

1-4　性向語彙の概念規定　12

第二節　調査研究の概要と方法 ―― 14

第一章　三言語における「性向語彙」の量的構造についての比較　18

第一節　総語彙数の比較 ―― 19

1-1　三言語の性向語彙を構成する語の比率　21

第二節　各意味分野と意味項目の量的分析 ―― 25

第二章 「語形式」性向語彙の意味構造についての比較 28

第一節 中国人大学生「語形式」におけるベスト10位の意味項目について ―― 29
まとめ 69
第二節 日本人大学生「語形式」におけるベスト10位の意味項目について ―― 70
まとめ 99
第三節 韓国人大学生「語形式」におけるベスト10位の意味項目について ―― 99
まとめ 124
総まとめ 125

第三章 プラス評価語彙とマイナス評価語彙についての比較 126

第一節 「働き者」と「怠け者」についての比較 ―― 127
第二節 「弁舌」と「訥弁」についての比較 ―― 133
第三節 「嘘つき」と「冗談言い」についての比較 ―― 136

第四章 三言語における性向語彙の語彙論的分析 139

第一節 接辞の定義と接尾辞の分布について ―― 140
1-1 日本人大学生の性向語彙における接尾辞 143
1-1-1 日本人大学生の性向語彙における接尾辞の統計 144
1-1-2 語形成と意味機能 146
まとめ 167
1-2 中国人大学生の性向語彙における接尾辞 168
1-2-1 中国人大学生の性向語彙における接尾辞の統計 168
1-2-2 語形成と意味機能 169
まとめ 184

1-3 韓国人大学生の性向語彙における接尾辞 184
1-3-1 韓国人大学生の性向語彙における接尾辞の統計 185
1-3-2 語形成と意味機能 187
1-3-3 その他 202
まとめ 208
第二節 性向語彙における接頭辞の比較 ―― 208
2-1 日本人大学生の性向語彙における接頭辞 209
2-2 中国人大学生の性向語彙における接頭辞 212
2-3 韓国人大学生の性向語彙における接頭辞 215
まとめ 217

第五章 造語法についての比較 219

第一節 比喩表現についての分類 ―― 219
第二節 比喩表現の意味機能について ―― 228
第三節 比喩表現に関する「文化背景」についての考察 ―― 231
第四節 理想的人間像について ―― 237
第五節 男女の固有名詞についての比較 ―― 240

終 章 249

第一節 大学生性向語彙の繁栄と実態 ―― 249
第二節 反省点と今後の展望 ―― 252

参考文献 254

資料篇

1.日本人大学生向けのアンケート調査表 257
2.中国人大学生向けのアンケート調査表 262
3.韓国人大学生向けのアンケート調査表 266

4.日本大学生のアンケート調査結果　語形式　語彙表　270
5.中国大学生のアンケート調査結果　語形式　語彙表　280
6.韓国大学生のアンケート調査結果　語形式　語彙表　292
7.アンケート回答者の生まれ年別、学校名、出身地　304
あとがき　306

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

研究篇

序 章

人間にとっての語彙体系は、その生活の必然に応じた生活語彙体系と見られる。その中で、対人評価の有り様は言語の側において、ふつう「性向語彙」と呼ばれる。これらの語彙は、単なる対人評価語彙として機能するだけでなく、同時に、自らが行動する場合の行動モラルの具体的な指標としても機能するものである。したがって、「性向語彙」は、他者に対しては評価として機能し、自己に対しては行動規範として働くという、一見性質を異にする2種のモラルの具体的な表象、ないしはシステムとして存立しているかのように見える。しかし、それ自身、実はすべての成員に共通に適用される集団的規範(社会的規範としての指向価値)の記号システム、ないしは記号的メカニズムであると解される。

本研究は、社会言語学、対照言語学、計量言語学などの方法を駆使して、アジアの三ヶ国——中国・日本・韓国の「大学生性向語彙」の実態を巡って比較文化語用論的な視点から、語彙量・意味・造語法・修辞法及び文化背景について多角的に比較研究を行うものである。つまり、一つ一つの「性向語彙」が有機的に集まって語彙体系を形成していくシナリオの中で、ある性向語彙総体を垣間見るということは、その文化を目の当たりにすることであり、その歴史的な姿をしっかりと見据えることに繋がっていく。更に、これは今後国際社会のミクロレベルにおける相互理解を深めていくためにも、必要不可欠な視線となると考えられる。言い換えれば、各国における「性向語彙」の対照研究は、異文化コミュニケーション研究を発展させるための重要な基盤になるということであろう。

「性向語彙」についての研究は、これまでも日本語の方言研究を中心に行われてきたが、共通語及び外国語における研究は殆ど行われていない。本論文は、「性向語

彙」研究をより深化させるべく、中国語・日本語・韓国語の共通語における「性向語彙」の使用量、語彙量などを取り上げ、日常生活の場面において対人評価を行う場合、それぞれの国の人はどのように捉え、如何に評価しているかの実態について調査分析を行う。その上で、大学生における「秩序と意識」の諸相を探り、彼らの思考と行動原理を明らかにしようとする。

また、本論文は、比較言語文化研究の一環として、中国・日本・韓国の三言語における対人評価語彙の全体像を把握、究明しようという目的でアンケート調査を実施し、その結果による使用実態や特徴を抽出し、整理した上で、三言語の共通点と相違点の解析に努める。その際、語彙の構成要素である個々の語の意味的側面を重視し、どのような語がどのような姿でその語彙と構成しているか、すなわち語彙の意味的特徴を明らかにすることに重点を置く。一方、言語と言語外の事実との関係を把握することで、その言語集団の文化とその根底に潜在している言語使用者たちの思考形態を併せて探ろうとする。

第一節　本研究の目的と位置づけ

三言語の共通語における「性向語彙」の実態を記述、研究することは、初めての試みであり、言語間の対照研究の新しい試みでもある。これまで日本の研究者によって、日本語の「性向語彙」の特徴を解明するために、その材料として地域社会における方言に限定して実態調査と比較が行われてきた。そのおかげで、「性向語彙」の方言研究においては著しい成果が挙げられた。これらによって、日本人の対人評価意識の解明、ひいては日本人の人間観を科学的に分析することが可能となり、多角的に日本人、日本社会、日本文化を見ることができるようになった。しかし、現在日本語における「性向語彙」の研究は大部分が「方言性向語彙」の研究に傾斜しており、共通語及び他国語との比較対照研究は全く行われていないと言っても過言ではない。

室山敏明氏が著書の中で、他地域の「性向語彙」の記述、分析、体系化と相互間の比較研究の必要性を論じ、異文化間の必要性については次のように述べている。「異文化間のコミュニケーションを円滑に推進するためにも、「性向語彙」という表象によって、個々の文化におけるミクロな差異を明らかにしていくことが必要とされよう。異文化間の接触が進めば進むほど、ミクロな差異の相互関係が重要になってくるからである。したがって、今、早急になすべきことは、日本の地域社会はもとよりのこと、地球上に存在する多くの地域社会を対象とした「性向語彙」の綿密な個別的記

述である。それらの結果を総合的に分析していくことこそ、異文化の共存の将来の方向を予測させるものとなろう。」[1]

この示唆を受け、今回の研究は多言語間の比較を通じて、多言語間の「性向語彙」のシソーラスを解明する比較研究の第一歩の試みとなろう。まず、中国・日本・韓国は、その歴史的・文化的な背景は異なるが、同じアジアで隣接し、古くからの交流が盛んに行われてきた事実を踏まえながら、言語使用面においての意識調査をすることを通じて、言語と文化の関連性を見出し、それを実証することができると考えられる。

また、今日までの経済や文化の交流とともに、対人評価語彙のあり方に関しても、国際的な比較研究の意義が大変大きくなっている。グローバル化の影響を受けて変容しつつあるローカルな場で日常的に使用する言葉の「多元性」に焦点を当て、そこで見られる共通性ないし類似性や差異、課題について比較検討する。三ヶ国の共通語に焦点を置きながら、ナショナル・アイデンティティの形成と変容に伴い、言語自体もまたこれらの関係性も変化してきた。いわば、生活文化の変容もさることながら、急速な変化に伴う人々の価値や意識の変化や多様化にも注目する必要がある。

本研究の独自性はその他にも、性向語彙を通してコミュニケーションと密接な関係を持つ、文化や意識面についての多角的な分析である。なぜなら、母語を操る上で文法の知識は不要だが、第2言語として学ぶ際には文法知識が非常に重要な役割を果たすと同様に、社会生活をする上で文化の知識は不要であるかもしれないが、外国人と接触したりあるいは外国で生活するなど、異文化交流する際にはその社会文化を理解することが極めて重要になるからである。

しかし、文化の存在を実体的に把握することは至難の技であると言わざるを得ない。だが、コミュニケーションは文化の核であり、これこそ生活の核となっているものである。つまり、文化は日常のコミュニケーション活動を限りなく積み重ねることによって集団特有の情報として記憶されたもので、それは基本的には極めて変化しにくく、時々に起きる出来事や状況に対する反応及び対処行動において司令塔の役割を果たすものであり、コミュニケーション行動に大きな影響を与えている。従って、日常生活で人々が使用する対人評価の様式(スタイル)を探ることが文化の存在を理解する一つの有力な手がかりになるのではないかと考えられる。これが、当研究の前提となっている考え方である。また、それを明らかにしてこそ、文化比較が可能となり、ひいては異文化コミュニケーション上の摩擦やすれ違いの要因を特定できるようになる

---

1 室山敏昭「方言性向語彙の研究―回顧と展望」平成11年度広島大学国語国文化秋期研究集会における口頭発表資料 27頁より

であろう。

本論文では、現在大学生の日常生活の中で用いられている「性向語彙」の実態に焦点を当てて、大学生が日常生活に使用している「い性向語彙」を収集し、中国・日本・韓国三ヶ国の共通語を中心に大学生――若者を対象に調査して得た「性向語彙」を統計的手法を援用して語彙量や特徴を抽出、整理した上で、三者の共通点、相違点を明らかにすることを目的とする。また、若者世代を切り口とし、「性向語彙」の役割、機能が如何に働いているかに重要な論点をおき、対人関係を中心とした日常生活で、語彙のネットワークの比較を微視的な分析の中でも重要な検討課題とする。更に、若者の対人意識、付き合いにおける秩序、価値観、行動規範及び三ヶ国の文化、伝統がそれとどのように関わるかをもあわせ考える。従って、本研究は各世代の「性向語彙」全体、体系研究の一環として位置付けることができる。

本論では、アンケートの調査結果により、まず若者の「性向語彙」の使用量に着目し、量的な分析と比較を行うこととする。つまり、三言語で同様な場面で使用する対人評価語彙を巡って、意味分野の量的構造(意味項目数・語彙量)の分析をするということである。主に、語彙量の極端に多い意味項目の分布状況も考慮しながら、三言語における共通点・相違点を見出し、各国の理想的な人間像について探ってみたい。

次に、語彙の形態性を分析する。各意味項目における語、連語、句の比率の検討と語形成、造語発想法、接辞などを考究し、各国の異同を探る。これによって、若者「性向語彙」の語構成上の特徴を把握することが出来る。若者の言葉は、隠語的な表現が多いと言われるが、その具体的な調査結果に基づき分析検証を試みる。

最後に、大学生の「性向語彙」ができた文化的・歴史的背景を踏まえながら、中国・日本・韓国三言語の「性向語彙」における実態、文化的相違と関連性が如何に言語に反映されているかを検討する。具体的には、「性向語彙」に見られる語形成法のパターンから概念化のパターンを帰納しようとするものである。人物評価の表現が、ある文脈に発生し、単語として概念化された「性向語彙」として成立して行くまでのプロセスが、語彙の中にどのように観察されるかを確認する作業である。また、「性向語彙」の実態の分析を通して、中国・日本・韓国三言語における大学生の対人評価意識の構造を解明すると共に、「性向語彙」の体系を支える原理として、どのような語彙が認められ、それが各国のいかなる生活上の要請に基づくものであるかを探りたい。

1-1 性向語彙研究の推移と現状

「性向語彙」とは対人評価語彙とも言われ、人の生まれつきの性格や日ごろの振る舞い、人柄などを評価の観点から捉えて表現する言葉のまとまりを指す。地域社会で用いられる「性向語彙」に着目し、この研究の重要性を初めて指摘したのは、藤原与一氏である。その後、「性向語彙」研究の意義を説いたことに呼応する形で、広島大学方言研究会は、同会の機関誌である『広島大学方言研究会会報[1]』で4号にわたって、「各地の性向語彙」を特集、掲載した。これは、藤原氏の分類体系に即して、各地の「性向語彙」を詳しく記述したものであって、各地の差異性と共通の特性を同一の基準によって、客観的に把握、究明することを意図して編まれたものである。

一方、渡辺友左氏[2]は、国立国語研究所在任中、主に東京語の「性向語彙」を対象として、社会言語学的見地から精緻な分析、考察を行い、日本人の対人評価意識の解明、ひいては日本人の人間観を科学的手法で具体的に究明するためには、「性向語彙」を対象化して研究を推進することが重要であることを強調した。

その後、室山敏昭氏が長年に亘って地域言語に用いられる「性向語彙」の調査・採集・整理に取り組み、その構造分析を徹底して掘り下げて行ったため、その内的構造体系を明らかにした上、更に「性向語彙」に見られる言語と文化を包括する広い視野と深い洞察力を以て「日本人論」「日本文化論」のような大きな課題を提示することによって、研究の新天地が切り開いた。それによって、永遠のテーマとも言うべき「日本人とは何か」という問いに明確な実体性を具えた、一つの明快な解答を提示しており、結果として錯綜を極めるジャパン・リテラシーに正しい認識の方向付けを与えることになったのである。いわば、室山氏が日本社会の構造を「＜負＞性のフィード・バックによるコントロール・メカニズムを基盤とする強固な『ヨコ』性の原理(平準化の原理)の構築であり、「ヨコ」性の原理に支えられた＜協調的な関係主義＞である」[3]と論破されたように、従来指摘されてきた日本社会の構造における「タテ」性の原理[4]と違い、日本社会の根底にある「ヨコ」性の秩序原理が生存していることが明らかとなった。これらの研究成果の蓄積によって、藤原氏が『方言学』の中で提示した「性向語彙」の分類システム(カテゴリー化)は大幅に拡

---

1 『広島大学方言研究会会報』の第13号（1969年）、第14号（1969年）、第15号（1970年）、第16号（1970年）

2 『社会構造と言語の関係についての基礎的研究（1）』国立国語研究所 1970年、『社会構造と言語の関係についての基礎的研究（3）』国立国語研究所 1973年

3 室山敏昭『「ヨコ」社会の構造と意味――方言性向語彙に見る――』和泉書院 2001年 248頁

4 中根千枝『タテ社会の人間関係』講談社 現代新書 1967年

張、充実され、概念体系を骨格とするより整合的な分類システムに改変されることとなった。

1-2 理論研究と実証研究

1-2-1 方言性向語彙研究の推移

地域社会において用いられる「性向語彙」に着目した、藤原与一氏は、その著書『方言学』(三省堂 1962年)の中で、愛媛県越智郡大三島町肥海方言の「性向語彙」を対象に35の意味項目に分類し、評価を基準とする量的観点から分析を行い、総語数335語を集計した。

表1

1	上人・実直	19	出しゃばり
2	丁寧家·細心家	20	人の評判をよくする人
3	きれい好き・その反対	21	お世辞言い
4	計画好きの人	22	見えぼう
5	のんき屋	23	滑稽人・冗談言い
6	熱中家	24	お調子者
7	いちがい者	25	おしゃべり者
8	豪胆家・大胆家・冒険家	26	誇大家
9	小心者・気弱者	27	虚言家
10	いらいらして落ち着かない者	28	ぬす人
11	沈着な人・ゆっくり屋・ぐずぐずする人	29	なになにそのもの
12	悲観家	30	不精者・道楽者
13	不平家・ぶつくさ言い	31	怠け者・放蕩者
14	短気者	32	物もらい
15	気むらの人	33	世間知らず
16	はらたて・だまり・ひねくれ	34	横着者・吝嗇家
17	意地悪者	35	物見に行くのが好きな人
18	性根悪		

また、『方言研究法』の中で、藤原氏は次のように述べている。「たとえば、「人間語彙」の「人論関係」のものでは、人をほめることばはすくなく、人をけなすことばは多い。語彙の繁栄の方向がここで問題になる。こういう問題を、その方言社会における社会的事実として見ていけばおもしろかろう」[1]。

ここには、すでに、「性向語彙」の研究と「語彙の繁栄化」についての注目が見られる。また、「性向語彙」と地域社会における社会的規範との相関性に注目することの重要性も論じられている。

以下では、号の順を追って、調査地点と調査者を掲げることにする。

1 藤原与一『方言研究法』東京堂出版 1964年 287頁

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com